

# 神経変性疾患の病態はどこまで分かったか

- パーキンソン病とその疾患モデル研究を中心に -

講師: 山門 穂高 博士

(京都大学 医学部附属病院 特定准教授)

医学研究支援センターは2021年11月11日をもって、開設10周年を迎えたのを記念し、支援センターを活用して成果をあげられた先生方にご研究・ご活動内容をご紹介いただくセミナー(MRSC Advanced User's Talk Series)をシリーズで開催します。

第7回目は、日本でも数少ない、充実した小動物行動解析を提供している当センター・マウス行動解析室を活用、神経変性疾患研究を精力的に推進されておられる山門穂高博士にご講演いただきます。皆様のご参加をお待ちしております。

日時: 2022年6月30日(木) 15:00 - 16:00

定員: 100名 (先着順)

開催形態: オンライン(Zoom)

申込方法: 以下のURLからお申込みください。

<https://forms.gle/4zsQC5ZywdJiZL5c7>



申し込み用  
QRコード

この説明会は「令和4年度  
医学研究技術実習」  
受講時間にカウントされます  
受講時間: 2時間



支援センター  
HP



実習連絡用  
メール  
アドレス

1次々切: 2022年6月29日(水) 13:00

\* 締め切り後、申込者全員にZoomのURLをメールでお知らせいたします

\* 申し込みフォームからは当日13時まで申し込み可能です

===== 問い合わせ先 =====

京都大学大学院医学研究科 医学研究支援センター

メール: [info@support-center.med.kyoto-u.ac.jp](mailto:info@support-center.med.kyoto-u.ac.jp)

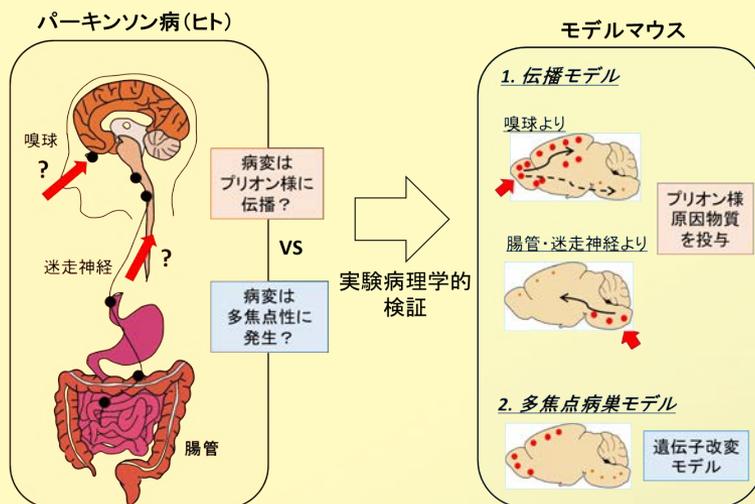
URL: <http://support-center.med.kyoto-u.ac.jp/SupportCenter>

## 講演要旨

パーキンソン病(PD)を含めた神経変性疾患にはプリオン様のタンパク質の凝集・蓄積という共通点があり、近年これらが嗅球や腸管から伝播することによって病態が進行するというプリオン仮説が全盛である。しかし、パーキンソン病においては病初期から多焦点性に病巣を認め、これに伴う様々な症状を呈することは必ずしも説明できない。

現在提唱されている二つの仮説、すなわち①プリオン仮説と②多焦点病巣仮説を元にPDの発症前を含めた全自然史が再現できるかを実験病理学的に検証した。これらのモデルマウスは診断時点でドパミン神経が約半数失われているとされるPDの超早期の前臨床モデルとしても有用である。本日は当研究室で作製し、行動解析室も利用させて頂き解析したこれらの実験モデルから得られた知見を紹介する。さらにPDを中心とした神経変性疾患研究の現状と今後の展望についてもお話しさせて頂きたい。

### パーキンソン病におけるプリオン仮説と多焦点病巣仮説



### <文献>

- Mov Disord.* 36:1554-1564, 2021
- Mov Disord.* 36:2036-2047, 2021
- Neurotherapeutics.* 2021 PMID: 34935120
- Brain.* 143:249-265, 2020
- eNeuro.* 7:ENEURO.0072-20.2020, 2020
- Hum Mol Genet.* 28:1894-1904, 2019
- eNeuro.* 5:ENEURO.0217-18.2018, 2018
- Mol Neurodegener.* 13:21, 2018